

■各種事業の報告

1. 国際協力事業

本年度はカンボジア、ウガンダの2カ国で、国際協力事業を行った。詳細は下記に明記した。

■カンボジア事業

2006年4月より特定非営利活動法人インターバンドの現地スタッフ3名を共同スタッフとして(特活)テラ・ルネッサンスで雇用することになった。また、特定非営利活動法人インターバンドのバタンバン事務所も同様に共同オフィスとして使用することになった。また、江角泰(えすみたい)を、カンボジア事業主担当の職員として2006年4月より雇用することになり、カンボジア事業を運営していく組織の土台を整えることができた。

地雷撤去後の村落開発支援

特定非営利活動法人インターバンドとの協働プロジェクトとして、カンボジア王国バタンバン州バナ地域において、「地雷撤去後の村落開発プロジェクト」を2006年10月より開始。同年9月には、カンボジア事業主担当の江角を事前調査に派遣。パイロット(事前)プロジェクトを、地雷撤去終了後のバタンバン州バナ地域チャン・ミエンチャイ・コミュニオン、チャン・ホー・スヴァイ村、ドーン村にて開始した。10月から3月までの6ヶ月間はフェーズ1として、2つの村で何らかの障害(地雷被害者、母子家庭、高齢者)をもつ最貧困層の17家族を選定し、2005年度までに実施してきた除隊兵士の社会復帰プロジェクトでの経験を生かして、少額の資金提供(毎月20ドル)と小規模ビジネスの立案、アドバイスによる支援を行った。家畜の飼育をしていた家族の中には、鶏が病気で死んでしまったり、豚が死んでしまうケースがあったが、野菜や果物の販売や雑貨屋の経営など複合的にビジネスを組み合わせ、収入源を複数持つことでリスクを回避できた家族は、自立して生活できるようになった。

女性義肢装具士養成

過去3年間に渡って奨学金を提供してきた、カンボジア・プノンペンにあるイギリスのNGOカンボジア・トラストが運営する義肢装具士養成学校(CSPO)のカンボジア人学生、ウム・ソクンさんが3年間の教育課程を非常に優秀な成績で修了し、2006年9月に卒業した。10月からは障害者の支援をしているNGOハンディキャップインターナショナルへ就職した。9月に開かれたプノンペンのカンボジア・トラストでの卒業式にカンボジア事業主担当の江角も出席した。また、同年10月からは新しくカンボジア人学生、ヒム・カンニャさんへの奨学金の供与(年間約90万円)を開始。彼女を奨学生として選んだ理由は、カンボジアの地雷やポリオなどの障害者だけでなく、世界中の障害者に義肢装具を提供したいという高い志と大学で勉強したかったにもかかわらず、十分な学費が払えないために、勉強をあきらめていたという家庭環境の2点である。



地雷撤去支援

現地で活動する地雷撤去団体 MAG へ、地雷撤去のための資金 1,000 ドルを 2006 年 5 月、8 月、2007 年 3 月に開催したスタディツアー時に贈与した。それぞれのツアーの際には、MAG の地雷撤去活動を行っている地雷原を視察し、地雷撤去のデモンストレーション、地雷の爆破作業を見学した。また、MAG オフィスにてカンボジアの地雷問題や撤去技術などの説明を聞き、地雷撤去現場ではディマイナー（地雷撤去要員）へのインタビューを実施。



カンボジア・スタディツアー

2006 年 8 月、2007 年 3 月に企画し、それぞれ 9 名、4 名の方にご参加いただいた。8 月のスタディツアーでは、参加者で帰国後の報告会を企画し、東京と京都の 2 カ所で報告会を開催した。3 月のスタディツアーでは、NPO 法人 NPO 佐倉子どもステーションと協力して、佐倉市内の中学生 3 名が参加。報告会を佐倉市で開催することができた。いずれのツアーでもテラ・ルネッサンスが取り組む『地雷』『小型武器』『子ども兵』の 3 つの問題をキーワードに、テラ・ルネッサンスの提携団体のほかにもポル・ポト時代の大量殺戮の跡地、孤児院、小学校、職業訓練校、さらにはアンコール遺跡群などを訪問。現地の人々との交流や、地雷原視察、病院への訪問を通して、現地に行かなければ体験できないことを、五感を使って感じてもらうことができた。

井戸建設支援



株式会社ピュアライフジャパン（代表取締役：間宮富士雄氏）社員・取次店様の支援で、最貧困層の住む村への井戸建設を NGO・GVSG（カンボジアの村を支援する会）と提携して実施。シェムリアップ州、アンコールトム郡に手押しポンプ式井戸を、2007 年 3 月までに 13 基の井戸を建設。特に、この地域は地雷被害者が多く、インフラ整備も遅れていた。井戸建設により、衛生的な水が得られるようになることで、乳幼児の死亡率を格段に減らすことができるほか、普段必要な生活水の確保、家畜飼育や作物栽培にも必要な水が得られるようになることで、周辺住民の生活状況の大幅な改善が期待できる。また、バタンバン州バヴェル地域において、テラ・ルネッサンス独自で 15 基の手押しポンプ式井戸を建設した。それまで川から水を汲んできて、飲み水や料理、作物の栽培、家畜の飼育を行ってきた住民は、水を汲む労力がなくなり、近くで衛生的な水が確保できるようになり、とても喜んでいる。2007 年 3 月に行ったフォローアップ調査でも、ポンプが壊れた井戸を住民が自分たちでポンプを修理し、維持管理していることが分かり、井戸が彼らにとってとても重要であることがよくわかった。

■ウガンダ事業

昨年度開設したウガンダ事務所に引き続き日本人駐在員を派遣し、ウガンダ北部地域にて4つのプロジェクト、カンパラ市にて1つのプロジェクトを実施。コンゴ事業開始に向けた調査活動も行った。また、外務省より日本 NGO 支援無償協力資金の供与を受け2007年3月に新規プロジェクトを開始。各プロジェクトの活動の詳細は下記の通りである。※外務省のプロジェクトの実質の活動は2007年4月以降の為、本年度の事業報告の記述はなし。

ウガンダ北部における元子ども兵社会復帰支援プロジェクト

(期間：通年 プロジェクト総経費：6,489,854 円)

昨年受け入れた第1期生15名に加え、23名の第2期生と29名の3期生を新たに受け入れ、77名の元子ども兵士とその近隣住民38名の計115名を、裨益対象とし支援活動を行った。同プロジェクトにおいては、協力団体の GUSCO (グスコ) でリハビリを受け、コミュニティーに帰還した元子ども兵を対象に、3年

以内に自立することを目標に、職業訓練や小規模ビジネスの指導など社会復帰に必要な訓練を行った。訓練の後半には元子ども兵の近隣住民にもマイクロクレジット(小規模融資)を支給し、近隣の貧困層住民と共に、自らが収入向上活動を実践し、経済的に自立し帰還地域のコミュニティーで社会復帰していただけるよう、下記のプロジェクトフローの元に活動を行った。同プロジェクトは左記図に示す4つの活動により構成されている。

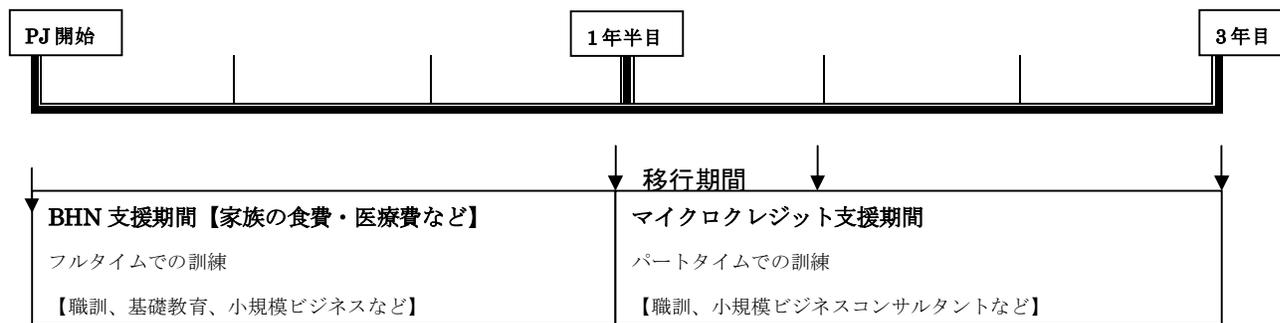
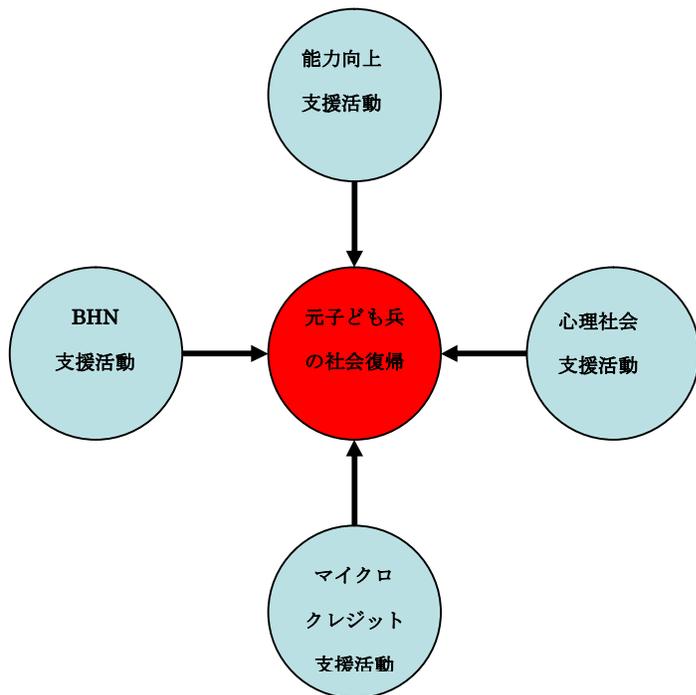


図1 プロジェクトのフロー図

①BHN（生存するための基本的ニーズ）支援活動（活動費：2,987,808円）

生活を安定させるために訓練期間中、受益者77名とその家族の状況に応じて、毎月の食費と医療費をクーポン券で配布した。そのクーポン券は、受益者各自の近くの食料品店、診療所でのみ使えるよう、テラルネッサンスと契約し、村の診療所で治療が困難な場合は、ラチョー病院(北部地域最大の病院)に搬送し、治療や診療を行った。また、受益者の家族の状況に応じて家賃や生活必需品の支給及び46名の受益者の子どもの学費の支援も合わせて行った。なお訓練期間中は毎日給食を施設内で調理し提供した。



(写真左) 受益者の近隣の食料品店で契約を交わす店主(左)、テラルネッサンス現地スタッフ(中央)、受益者(右)
(写真中) 徒歩で通える近隣のクリニックで契約書にサインをする受益者、名前がかけない受益者は拇印を押す
(写真右) 訓練施設での給食配給、豆とメイズが基本的な毎日の給食

②能力向上支援活動（活動費：1,466,666円）

受益者が収入向上活動を始めるのに必要な職業技術、識字、計算などの能力を向上するための訓練を行った。職業訓練では、洋裁、手工芸、服飾デザインの3科目を開講し、基礎教育の授業で識字、算数、英語の授業を行った。カリキュラムは各受益者の希望と能力に応じて個別にオリエンテーションを行った上で、柔軟に設定しているが、基本的に全月曜日～金曜日までの平日の半日間は、①洋裁、②服飾デザイン、③手工芸などの職業訓練を受け、週2回、半日間の基礎教育の授業を履修してきた。また、予習と復習をかねて職業訓練、基礎教育共に個別指導や障害者のための特別授業も行った。



(写真上段) 手工芸の職業訓練の様子、染色のグループ実習の様子
(写真左) 基礎教育クラスの様子。算数、識字教育、英語の科目を学習している



(写真左) 手工芸訓練の特別授業の様子。盲目の受益者(男性)が視覚障害のある裨益者(女性)に対して教えている様子
(写真中) 手工芸のインストラクターが視覚障害者2人の補助をしながら指導している様子。実習で作っているのは玄関マット

(写真右) 実習を終え初めて自分で玄関マットを作り始めた受益者、普段物静かな彼女の笑顔が微笑ましかった



写真上段右) 洋裁訓練の様子、セメントの

空袋を布代わりにして訓練中始めて完成させた子ども服(右上)

(写真下段左) 個別指導の様子。彼女は支援開始前直前に息子をマラリアで亡くした。その後、初めて笑みを浮かべた瞬間だった

(写真下段中央) 服飾デザイン訓練の様子。現在、機材が一台のみの為、生徒は交代で機材の操作を学んでいる

(写真下段右) 終了式の様子。学期後、全員が通知表を受け取っている様子

③心理社会支援活動 (ルーツ&シューズ活動) (活動費: 875,356 円)

受益者は全員、グスコ(協力団体)などでのリハビリを数週間受けた後、帰還しているが、トラウマ(心の傷)が完全に消えるわけではなく、また、同じ境遇の元子ども兵だけで生活していたグスコから、一般社会に出た時に、経済的な不安や地域住民との関係など、新たな心配事や悩みでストレスを感じる子どもも少なくなく、受益者個別に悩みやトラウマやその程度も様々であることから、個別カウンセリングとグループカウンセリングを両方実施し、音楽や伝統ダンス、自作ドラマの創作、日本の子どもとの国際交流(手紙交換など)を通じたトラウマケア、伝統儀式を通じた心理社会サポートなどを行った。また、週に一回、元子ども兵とその近隣住民を対象に平和教育の授業を開講し、「信頼」、「友情」、「ルーツ&シューズ」などをテーマにワークショップを開催したり、アチヨリ民族の伝統的な和解方法などについて学ぶ平和教育を行った。



(写真左) 伝統儀式を通じた心理社会サポート。出身の村でアチヨリ民族の伝統的儀式を行い、悪霊を追い過去の残虐行為などを清算し精神的な安定を図る儀式。受益者の出身の村近くの国内避難民キャンプにて行った

(写真中央) グループカウンセリングの様子。ワークショップ、対話、歌など様々な形態で毎週一回行なった

(写真右) 個別カウンセリングの様子。授業の合間、昼休み、放課後に受益者が個別にカウンセリングルームにほぼ毎日訪れる



(写真左) 国際交流活動の様子。日本の高校生からのビデオレターを見る元子ども兵たち。ビデオレターの交換の他に手紙のやり取りなどを基礎教育クラス、課外授業の中で行った。

(写真右) 平和教育クラスの様子。伝統的な土着の和解方法などを近隣の住民とともに学んだ。また子どもの権利や異文化理解の大切さなどを学ぶ授業も行った。



(写真右) 製作ドラマの発表会。自らの体験をドラマを通して表現。この外にも歌や伝統ダンスを通じた心のケアを実施

(写真左) 国連国際平和の日に世界中のルーツ&シューツグループと共に平和の鳩を製作しパレードを行った

④マイクロクレジット支援活動 (活動費：1,160,025 円)

小規模ビジネスクラスを週2回(1期生/2期生毎)開講し、貯蓄の重要性、ビジネスの基礎的な知識などマイクロクレジットを使って収入向上活動していくために必要な事項の訓練を行った。この活動では元子ども兵の受益者に加え、各自の近隣の貧困層の住民をパートナーとして受け入れて実施した。一期生とその近隣住民30名中、18名が今年度、同クラスを修了し、昨年10月マイクロクレジットを元に収入向上活動を始めた。また、残りの一期生たちへの授業も第2学期(昨年12月から)継続して行い、同時に2期生とその近隣住民にも小規模ビジネスの訓練を2学期より開始した。また、マイクロクレジットを受け取った受益者たちは収入向上活動をそれぞれ行いながら、施設でもパートタイムの訓練生として更なる技術の向上に励んでいる。



(写真左) 小規模ビジネスクラスの様子。毎週、近隣の地域住民と共に小規模ビジネスの方法などマイクロクレジットを使って収入向上活動をしていくために必要な知識を学んでいる

(写真右) 小規模ビジネスのクラスを見事修了しマイクロクレジットを受け取った第一期生。契約書とクレジットを手手に現地スタッフ(小規模ビジネス指導員)と記念写真。



(写真左) マイクロクレジットを受け取り炭の小売業を始めた受益者。始めは不安定な日々が続き本人も自信なさげにしていたが、4ヶ月後には収入も訓練前の10倍以上になり、得た収入で炭を保管する保管庫まで自分で作り上げた。写真はその保管庫の前で現地スタッフ(右)と共に保管庫完成を喜び合った受益者

(写真右下) 近隣の住民と協力してマイクロクレジットをもとに野菜栽培や農作物の小売業を始めた受益者とそのパートナー(貧困層の近隣住民)。写真は始めて植えた野菜に水をやる2人。

(写真左) 市場の一角に場所を借りて洋裁技術を使って洋服の修復やテーブルクロスを作って販売を始めた受益者。彼女は農作物の小売も同時に行っている



スマイルハウス建設プロジェクト (期間：昨年度～5月 プロジェクト費：1,048,614円)

昨年度開始した洋裁訓練の為のスマイルハウス建設は今年度4月に完成し、同棟での元子ども兵社会復帰のための活動が開始されミシン、机、椅子、黒板等の訓練に必要な機材、備品が整備された。

※プロジェクト費は今年度4月以降の支出のみ計上



グローブハウス建設プロジェクト(期間：7月～11月 プロジェクト費：2,246,354円)

スマイルハウスの隣に基礎教育、平和教育、環境教育、母子健康保健教育などの訓練をするための施設、グローブハウスを建設した。1つのオフィススペースと倉庫、1つの訓練教室で部屋割りが構成されている。



クラージュハウス建設プロジェクト (期間：7月～3月 プロジェクト費：2,258,203円)

グローブハウスの隣に、手工芸などの職業訓練を実施する為の施設、グローブハウスを建設した。2つの建物があり、その一つは機材収納ルームと訓練ルームで構成される訓練教室、もう一つは給食調理の為の給食所、施設備品、資材管理の為の倉庫を合わせた建物。また、施設へ水道を引く為の水道整備した。





(写真右上) クラージュハウスの別棟として建設した給食所と機材・資材管理庫。これまでは野外で50人以上の給食を調理していたので、この給食所により食事準備が効率化され、調理器具や食材が安全かつ衛生的に管理できるようになった。給食準備は担当職員2名と受益者がグループに分かれ協力し毎日作っている。また、その他の機材や建設資材、訓練資材なども安全に管理保管することが可能となった。

(写真左上と左下) 水道設備。水道は1キロの離れた水源(水道)から地下にパイプを埋め工事を行った。パイプの埋設工事は近隣の富裕層の住民に協力を仰ぎコストを分担した。これまで水道がなく1キロ以上の道のりをポリタンクで水を運んでいたのが、水道設備ができたおかげで余分な労働と時間を減らすことが出来ただけでなく、受益者たちが衛生的な環境で訓練を受けることが出来るようになった。また、幼児を抱えるチャイルドマザーたちにとって子どもの衛生管理を実践する場にもなっている。

小型武器問題啓発プロジェクト (プロジェクト費 : 373,747 円)

昨年度に引き続き6月の小型武器問題行動週間に、世界中の I A N S A (国際小型武器行動ネットワーク) 加盟団体と共に、ウガンダでも U A N S A (ウガンダ小型武器行動ネットワーク) と協力し、小型武器問題の啓発活動を行った。小型武器の被害が最も深刻な東アフリカ諸国が合意したナイロビ議定書に準じて、ウガンダ政府が2005年に小型武器行動計画を発足したが、政府と市民社会との協力と連携を強化することが求められており、政府と NGO がこの問題を協力し促進していくために、政府から内務省事務次官、内務省小型武器問題担当官、市民社会メンバー(UANSA)を招きシンポジウムを開催。同時にメディアを通してこの問題を一般市民に啓発する為、報道関係者に呼びかけ約50名のジャーナリストが同シンポジウムに参加した。また、同シンポジウム以外にも、定期的にUANSAのメンバーらと小型武器問題への取り組みについてのウガンダでの現状、対策、活動方針、協力体制などについて話し合うミーティングを開催した。



(写真左) 小型武器問題啓発のためのシンポジウム。今年で第2回目。



(写真左上) シンポジウムに招致した神の抵抗軍の元子ども兵士(テラルネッサンスの受益者)。彼は子ども時代から18年神の抵抗軍の拘束され戦わされてきた。また、戦闘中、小型武器により片足を失った。被害者の立場からこの問題を語った。
 (写真右上) シンポジウムの様子はウガンダ最大のニュース番組WBS放送で2度放送された。テレビに映っているのは当会受益者(小型武器被害者)と現地スタッフ(女性)の2名。またその他ウガンダ2大新聞などを通して市民に問題を啓発することが出来た。

コンゴ事業調査活動 (活動費: 520,851 円)

来年度からコンゴ事業を開始する為の調査活動を今年度8月と3月に実施した。第一回調査はウガンダ駐在の日本人職員一名とウガンダ現地スタッフ1名をコンゴ東部の南キブ州、ブカブ市に派遣し、同地での子ども兵の状況調査、治安状況の調査、元子ども兵への聞き取り調査、パートナーNGOの候補選定の為の活動を行った。また、同年6月に作成した小型武器問題の啓発用のポスター1000枚の配布状況などをモニタリングし、その評価を行った



(写真左上) コンゴ共和国、ブカブ市の国連事務所、行政機関、各NGO事務所、学校、教会などに配布した小型武器問題啓発用のポスター。このポスターは現地NGOのGRAMに委託し各所に配布された。(第一回調査活動)

(写真右上) コンゴ共和国、ブカブ市から車で5時間の場所にあるカロンゲ郡にある現地NGOのオフィス。ここは内戦当時の激戦区の一つであり、今も頻りに住民たちはゲリラ軍の被害(強盗、レイプなど)を被っている。ここでは現地事情やGRAMの活動内容、元子ども兵の聞き取り調査などを行った。

(写真左) GRAMの代表メンバーらと当会理事長。調査最終日、協働内容を最終的に纏め上げ、提携契約を結び来年度からの今後事業を開始する運びとなった。

視察・スタディーツアー（活動費：3,504,775 円）



今年度は2度の視察・スタディーツアーを実施した。1度目は8月に実施しスマイルハウス建設や第2期生へのご支援を頂いている松緑神道大和山様の職員3名、ルネッサンスサポーター(里親)会員3名、他の日本のNGOで活動し当会にもご支援頂いている今井様の計7名が参加し、当会理事長及び当会インターン生2名が添乗員として参加した。2度目の視察・スタディーツアーは3月に実施され、クラージュハウス建設、水道設備などをご支援いただいた鍵谷様、浜田様の2名及びルネッサンスサポーター(里親)会員1名、当会理事長、広報・記録担当のカメラマン1名の計5名が参加した。視察内容は第1回、2回とも当会のウガンダ北部のプロジェクト実施地域グル市の当会施設訪問、訓練・授業風景の参観、受益者との交流、グル小学校盲学級の視察などを行った。

(写真上) 第一回視察にて里子と面会したルネッサンスサポーター(里親)会員の視察参加者。



(写真左) 視察団を迎え入れる受益者と現地スタッフ

(写真中央) 基礎教育クラスの授業を参観する視察団のメンバー

(写真右) 里子と初めて対面したルネッサンスサポーター(里親)会員の視察メンバー



(写真) 受益者と視察団の交流の様子。受益者たちは心理社会支援(ルーツ&シューズ活動)の中で習っている伝統ダンスや歌、創作ドラマを披露した(第2回視察)。また、日本からの視察団も歌やビジネスに関する講義(ミニワークショップ)、日本の踊りの披露、日本の子どもたちからのビデオレターの上映などを行った。写真左は青森のねぶた踊りを披露する視察団のメンバー(第一回視察)



(写真左) 第2回視察団とクラージュハウスの開講記念セレモニーの様子
(写真右) 訓練を受けた受益者たちが試作品を持ち寄り視察団に販売演習している様子

2. 啓発事業

本会の活動や、取り組んでいる課題（地雷、小型武器、子ども兵）について、講演やイベントの実施などを通して、啓発活動に積極的に取り組んだ。

講演

理事長による講演を各地で実施。企業での講演が増加した。主なテーマは、「地雷畑で見た夢（地雷）」、「ぼくは13歳 職業、兵士（子ども兵）」

課題の啓発、各種キャンペーン

テラ・ルネッサンスが取り組む3つの課題、地雷、小型武器、子ども兵問題を解決するためには、市民への啓発活動と、国連や政府関係者への働きかけという2つのアプローチが必要になる。私たちは、小型武器問題に関心のあるNGOで、日本小型武器行動ネットワーク（JANSA）を結成。様々なキャンペーン活動を展開している。

また、上述のJANSAと、アムネスティ・インターナショナル、オックスファムと協働し、コントロールアームズ（武器規制）キャンペーンの国内展開を開始した。武器貿易条約を制定するというひとつの目的を達成するため、100万人の顔写真による署名活動（ミリオンフェイスキャンペーン）を、各地でボランティアの協力により実施した。

日本国内でのコントロールアームズキャンペーンの推進

2003年10月、通常兵器の規制を求める「コントロール・アームズ」国際キャンペーンが始まり、キャンペーンが求めているものの一つである武器貿易条約（Arms Trade Treaty: ATT）を支持する、世界中の100万人の人々の署名を「顔」（＝写真や似顔絵）で集める「ミリオン・フェイス」も開始された。日本でも2004年から日本キャンペーンが行われてきた。テラ・ルネッサンスでは、本会主催イベントや、各地での会員の自主的な取り組みにより、顔署名を集めてきた。

そして、2006年6月、100万人の顔署名は、国連会議の場でアナン事務総長に手渡された。翌月の7月24日、国連総会に向け、ATTについての議論を国連の場で開始するための決議案が発表された。この共同提案国に日本が含まれることで、日本もATTへの支持という立場を公式な形で初めて明確にした。同年10月11日、修正された決議が77カ国により共同提案され、国連総会にて153カ国の賛成で採択された。

これにより国連プロセスの中で武器貿易条約について正式に議論されることになった。

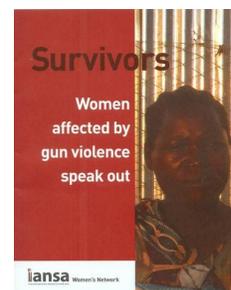
日本キャンペーンとして、これまで日本で「ミリオン・フェイス」に参加した約1万人の方々の声を日本政府に届け、共同提案国に日本が含まれたことを歓迎するとともに、10月23日の週に予定されている票決に向けた支持国増加の努力および今後の取り組みへの積極的な関与を求め、2006年10月17日「ミリオン・フェイス」顔署名提出式を実施した。顔署名は外務省の関口昌一外務大臣政務官に手渡された。

第2回国連小型武器履行検討会議への参加

2006年6月26日から7月7日までニューヨークの国連本部で開催された第2回国連小型武器履行検討会議へスタッフの小川と江角、インターンの吉田の3名を派遣した。会議では、日本政府代表団へのロビーイング活動や各国政府代表団との接触と意見交換、毎日開かれる IANSA（国際小型武器行動ネットワーク）の戦略ミーティングへの参加と意見交換などを行ない、本会議の傍聴のみならず、毎日開催されるサイドイベントへも参加し、この会議に合わせて出される各種の小型武器問題のレポートやその出版記念報告などに参加して世界中の小型武器問題の情報収集を行なった。



会議初日には当会も推進団体として日本で進めてきた国際キャンペーン（ミリオンフェイス）により世界中から集められた100万人の顔写真入の署名がコフィー・アナン国連事務総長に手渡された。また、IANSAの女性ネットワークがこの会議に合わせて出版した小型武器被害の冊子にテラ・ルネッサンスも協力し、支援するウガンダの元子ども兵士の体験を寄稿し、テラ・ルネッサンスの受益者の写真が表紙となった。この冊子はすべての政府代表団や参加者に配布され、このような形で現場を持つNGOが小型武器被害の現状を先進国NGOと情報共有し連携することで、被害者の声を会議に反映させようと働きかけを行った。一方、残念ながらこうした活動にも関わらず会議自体は、アメリカ政府を始めとした数カ国の反対により成果文書さえもまとまらず、小型武器の行動計画自体も白紙状態に戻ってしまう結果となった。しかしテラ・ルネッサンスにとっては、3名を派遣し、小型武器問題の情報収集と他団体とのネットワーク作り、日本政府代表団との接触、そして3名の国際会議での貴重な経験ができたことは、大きな成果であった。



ウガンダ事務所スタッフの来日イベント

テラ・ルネッサンス初の海外事務所スタッフであるトシャ・マギーをウガンダより招聘。各地での報告会で自身の生い立ちから現在のテラ・ルネッサンスでの取り組みを報告した。のべ1,000人が参加し、各地ではマスコミの取材も受け、各種新聞などで掲載された。子ども兵問題の啓発や、テラ・ルネッサンスの広報に寄与した。

- 11月10日（金） 京都報告会（主催：本会）
- 11月11日（土） 東京報告会（主催：本会）
- 11月12日（日） 沖縄報告会（主催：本会 共催：株式会社沖縄教育出版）
- 11月14日（火） 鹿児島報告会（主催：地雷ゼロ鹿児島）
- 11月15日（水） 宮崎報告会（主催：ひむかの宝箱）
- 11月21日（火） 埼玉報告会（主催：自由の森学園中・高等学校）

- 11月23日(木) 群馬報告会(主催:立正佼成会高崎教会)
- 11月23日(木) 埼玉報告会(主催:コスモライフ研究会)
- 11月24日(金) 愛知報告会(主催:株式会社アイケイ)

主催イベント

本会主催イベントを東京都内、京都市内にて計4回実施。のべ250名が参加。

- 04月12日(水) 中井隆栄理事チャリティーセミナー
- 10月07日(土) スタディツアー報告会(京都府)
- 10月29日(日) スタディツアー報告会(東京都)
- 11月10日(金) 京都報告会(主催:本会)
- 11月11日(土) 東京報告会(主催:本会)
- 11月12日(日) 沖縄報告会(主催:本会 共催:株式会社沖縄教育出版)

各種イベントへの参加

本年度は、下記のイベントに参加し、本会の活動紹介や取り組んでいる課題の啓発などを行った。

【2006年】

- 05月21日(日) 第12回チャリティーバザー(主催:立正佼成会唐津教会)
- 09月09日(土)~10日(日) チャリティーバザー(主催:宗教法人松緑神道大和山)
- 10月14日(土) 大阪平和映画祭(主催:同実行委員会)
- 12月09日(土)~10日(日) 国際協カステーション(主催:財団法人京都府国際センター)

【2007年】

- 02月04日(土)~05日(日) ワンワールドフェスティバル(主催:同実行委員会)

スタディツアー

本年度は、2006年8月、2007年3月にカンボジアへのスタディツアーを企画した。計13名参加。

- 08月28日(月)~09月02日(土) カンボジアスタディツアー 9名
- 03月14日(水)~21日(水) カンボジアスタディツアー 4名

インターネット(ホームページ、メールマガジンなど)

理事長、小川理事、インターンによるブログを開設し、適宜、活動の最新状況を伝えるべく更新作業を行った。また、メールマガジン「テラ・ルネニュース」を定期的に発行し、現在のところ、2000名の読者に、活動報告、イベント情報などを提供している。

報道

本年度は、理事長の講演やイベントを開催する毎に、プレスリリースを発行し、取り組みが報道されるように努めた。